

鈴木寛・文科副大臣と本田宏・栗橋病院院長補佐が講演

第5回「現場からの医療刷新についての勉強会」レポート



東日本大震災後の医療再生が注目される中、参加者は熱心に講師の話に耳を傾けていた



大学医学部・附属病院の取り組みについて話す鈴木文科副大臣



マクロな視点で日本の医療再生について語る本田栗橋病院院長補佐

東日本大震災発生から約4か月が経過した7月6日。本誌主催で第5回「現場からの医療刷新についての勉強会」を開催した。第1回からフル参加を果たしている鈴木寛・文科科学副大臣とともに、今回は埼玉県済生会栗橋病院院長補佐、医療制度研究会副理事長の本田宏氏が登壇した。会場の東京・港区「料理王国Academyサロン」には医師と医療周辺の企業人らが集った。

前半は本田氏が「大震災後の日本の医療再生」をテーマに講演。まずは本田氏が医療再生について提言を続ける契機となった故高岡善人・長崎大学名誉教授との出会いから語り起こす。「世界から見た日本の医療」「日本の医療はなぜこうなった」「医師数の実態」「医療費はどうすればいい」「改善への道」と次々に腑分け。全国で市民向けに講演を重ねる氏ならではの切り口だった。

後半は鈴木氏が「東日本大震災からの復興～大学医学部・附属病院の取り組み～」と題し講演した。今回の震災では被災地への医療支援において全国の大学医学部と附属病院が大きな役割を果たした。具体的には医薬品などの物的支援や医師派遣などの人的支援、放射線医療の提供、医療支援体制や医師派遣システムの構築などだ。今後の復興に向けては6月25日に決定した東日本大震災復興構想会議による「復興への提言～悲惨のなかの希望～」から文言を引きながら構想を紹介。地域医療支援センター構想、加え医療イノベーションの拠点づくり、その大きな柱となるのが東北メディカル・メガバンク構想だ。東北発の次世代型医療体制構築には今後も注目したい。

講演後は講演者と参加者による恒例の質疑応答。震災からの復旧・復興や医師数増加について現場を知る者ならではの率直な意見が交わされた。

その後、懇親会に移り、乾杯の後は勉強会ではできなかった話にも花が咲く。両講師を中心に参加者同士の交流が時間いっぱいまで続いた。



矢崎義雄・国立病院機構理事長(左)と堀口彰・小林製薬医療機器事業統括本部特別経営顧問



竜崇正・千葉県がんセンター前センター長(左)と本田氏



談笑する武久洋三・日本慢性期医療協会会長(中央)



太田照男・栃木県医師会会長(左)と野村洋子・インブルーム社長



鈴木文科副大臣と意見を交わす芝真彰・せんば東京高輪病院院長(右)



左から本田氏、草野敏臣・ミッドタウンクリニック理事長、矢崎氏



左からETERNALの塚本厚志氏、松本純夫・国立病院機構東京医療センター院長、鈴木文科副大臣と語る平山登志夫・平山病院院長(右) ETERNALの安平説夫氏

